

# 思ひ草

第5号

平成23(2011)年7月20日 発行

## 心を耕す教師に ～田植えのしつけ～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



今年は何年よりも早く、入梅。「しつけ時だな」そんな声も聞こえてきそうです。ここで「しつけ」とは、田植えのことです。早苗を本田に移すことを、年配の農家の方は、今でも「しつける」と言います。しつけられた早苗は、土地の栄養分を根から吸収し、太陽の光をあび、水を吸って、すくすくと成長し、「一株立ち」をしていきます。

一株立ちというのは、自立のことです。

子育てのあり様を見事に言い当てています。稲作文化の日本では、子どものしつけを田植えにたとえたのです。ここでの子育てのポイントは、3つです。

第一に、土壤に含まれている栄養分、即ち「心の栄養(規範)」を吸収させることが、大切であるということ。第二に、伸びるのは稲自身、つまり伸びるのは他の誰でもない、子ども自身であるということ。第三に、目標は「一株立ち」であるということ。つまり、子どもの自立が大切であるということ。

しつけは、欧米ではディシプリン(discipline)と言います。

日本語に訳せば、「訓練」です。しつけは確かに、訓練かもしれませんが、日本ではもっと意味深いのです。

例えば、「整理整頓」や「物を大切にすること」。そのしつけの心は、「相手のことを思いやる」ということ。相手の立場に立って、その痛みをくみとれる相互理解を教えるこそ、田植えのしつけ。「挨拶をする」。そのしつけの心は、「心を開いて、相手を受け入れてあげよう」という感謝の心を教えるこそ、田植えのしつけ。「私語をしない」。そのしつけの心は、「相手のどんなつまらない意見や考えも、大切に聞いてあげよう」という人権意識を教えるこそ、田植えのしつけ。



## アンデルセン童話を読んで・・・

初等教育学科 教授 矢吹 省司



先頃アンデルセン童話をめぐる座談の会への参加を依頼された。私が担当するテーマはその童話に読む「近代と自我」であった。

取り上げられる4つの童話(いずれも人気が高いことで選ばれた)を改めて読んでハッと気づいたのは、どの童話も「足の痛み」に触れていることである。「マッチ売りの少女」は雪道を裸足で歩く。「赤い靴」のカレンは赤い靴を履いたまま足を切り取られる。「みにくいアヒルの子」の足は池の氷に凍りついてしまう。「人魚姫」は2本の脚で歩くとき鋭いナイフの上を歩くような痛みを感じる。

こうしたことと「近代の自我」がどう関係するのか? あれこれ思い巡らすうちに、私は精神分析学の基礎固めに患者として最も重要な貢献をしたエリザベト・フォン・R嬢を思い出した。彼女は2年以上もの間、心因性の脚の疼痛を頼み、歩行困難を訴えていた。

フロイトによると、R嬢の症状は「頼れる人がいない」「独り

で立っているしかない」苦しみを身体症状として象徴的に表現したものである。そしてその深層の原因は、R嬢が道ならぬ愛の感情を抱きながら、それを自覚しなかったことにある。そんなR嬢に、フロイトはこう説得した。「たとえ不倫の愛の感情でも、感情というものに対して人は責任を負うことができないし、負う必要もない。」

後日ある舞踏会で、自分の前を軽快なテンポでさっと踊り去っていくR嬢の姿を、フロイトは目撃している。R嬢は外国人との自由な恋愛から結婚生活に入ったという。

では上記の童話の3人の女性たちはどうなったか。いずれも高みへ昇っていった。内2人は神様のみもとに落ち着き、あとの1人は以後300年にわたり空気の精として善行を積むことになった。

我々は近代の自我として、こうした決着の付け方には馴染みがたい。それでもアンデルセン童話の人気はまだ落ちている。不思議だ。人の心はこんな不思議で一杯なのだ。

## 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。今年度から始まった教育実習の様子についても紹介します。

### 教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

5月初旬から、初等教育学科3年生の教育実習が始まりました。5月から7月にかけて、39名の学生がさまざまな地域の小学校で活動しました。

東京都	14名	神奈川県	12名(横浜6名)
埼玉県	4名	千葉県	2名
栃木県	1名	静岡県	1名
長野県	1名	新潟県	1名
岡山県	1名	東京(私立)	2名

### 教育実習を終えて

初等教育学科 3年 高橋 優子

教育実習を通して、私は教師になりたいという意思が強くなった。なぜなら、教育実習の一日一日にやりがいを感じる事が出来たからだ。私は教育実習以前、教師になりたいという気持ちの反面、果たして教師という職業は自分に向いているのか、疑問を抱いていた。しかし、「教師という立場で子どもたちと向き合うこと」に自分自身やりがいを感じることができ、また小学校の先生方に認めていただくことが出来たため、教師を目指そうと改めて感じさせられた。教育実習での時間は、私にとって人生の転機になる大変濃い1ヶ月であった。

私たち教育実習生は、指導者として未熟なため、多くの壁にぶち当たり失敗することもある。特に実習中の授業では、失敗ばかりで落ち込んだ。子どもたちの理解に沿って授業展開できなかったことを反省し、それをもとに最後の全日経営のときに子どもたちの目線に立っていこうと考えた。終わった時には、「もっと授業をしたい」と思うことができた。

失敗してこそ成長できると思うので、失敗することを恐れず挑戦することが大切だ。多くの課題を見つけることで、よい教師をめざしたいと思う。

これからも学び続ける精神を忘れることなく、大学での授業やアシスタントティーチャーや部活動などに精進していきたい。

### 教育実習の経験から

初等教育学科 3年 石川 等

4週間という実習期間は長いようで、あっという間だった。

実習中はとにかく時間の流れが早かった。朝起きて、登校して、気づいたら夜で帰宅、早く眠りたいが課題が山積みで結局深夜まで眠れず…。そんな数十分すら貴重に感じる毎日で、時間の有難みというものを感じた。

最初はそんな毎日が苦痛で、実習を投げ出して大学生活に戻りたくて仕方なかった。授業は失敗ばかりするし、担当の先生には叱られ、苦しくて辛い思いをたくさんした。でも実習に来た以上、逃げられるわけでもないし、何より悔しいままに終わるのは石川イズムではない。だからどんな状況でも楽しむように気持ちを切り替えた。教師が一番楽しんでいなければ、子どもはついてこないと思ったからだ。

授業は下手で何も教えることはできなかったが、その分子どもと汗を流して遊びたくさん時間を共有した。もちろん授業は上手いに越したことはないが教師になってからいくらでも時間をかければいい。今の自分にできることは、子どもたちと同じ時間を過ごしていくことであり、その中にこそ大切なことはあるのだと思った。

ただ毎日のがむしゃらに過ごし、辛い経験を乗り越えて、初めて見えてくるものもあるのだと知った。指導して下さった先生の本気と子どもたちと汗を流しながら過ごした時間から、人としても少しくらいは大きくなれた気がする。今までの自分にはこんな熱い文は書けないだろう。

教育実習という経験が出来てよかったと思う。教育実習の経験から、教師になろうという気持ちが少しずつ膨らんできた。

### これからの教育実習の予定

実習を終えた人は、記録と振り返りをまとめているところです。後期の教育実習については、8月末から始まります。

# 教育インターンシップ

今年度も活動が始まりました

## ★今年度の教育インターンシップが始まりました

平成23年度インターンシップにかかわる学生の状況

人間開発学部初等教育学科	66名
人間開発学部健康体育学科	14名
計80名	

このほか、横浜市内では、教育インターンシップの授業は取っていないが、センターを通して学校で教育ボランティアを行っている学生が10名、昨年からの継続の学生が12名います。

## ★活動記録から・・・こんな活動が始まっています

<p>5限 国語 (個別支援後)</p> <p>「ことばってふしぎ」 子どもたちに手伝ってもらい、 何パターンかの劇をやる。</p> <p>〈パターンA〉</p> <p>・物を貸し借りする時</p> <p>ねえねえ ① いいよ。 貸してよ。 ② いいよ!</p> <p>③ いいよ!</p> <p>「どちらが気分がいいかなし」</p>	<p>☆A児とD児が他の子に対する言動や態度が厳しかったため行われた授業でした。</p> <p>子どもたちを実際に演技を混じえて、今日一日をふり返らせる指導は、子どもたちに分かりやすく良い授業だと思いました。でも子どもたちがこの授業が終わって、どのくらい自分のものにできるかは</p>
---	--

2年森ゆりかさんは、運動会の様子を書きました。

運動会

5・6年の組体操は2人出られなかった児童がいたが、他の児童がそのことをカバーして、とても良いものになっていた。最後の「がんばろう!日本」のメッセージにはとても感動した。低学年・中学年の児童も夢中になって見ていた。赤白対抗選抜リレーでは、今までで一番の声援だったように感じた。全校児童と保護者の応援を受けて、リレーの選手は一生懸命に走っていた。

2年山川朋子さんは、国語の学習で、気づいたことを書きました。

## 第1回教育インターンシップ連絡協議会開催



6月16日(木)、第1回教育インターンシップ連絡協議会を開催しました。

横浜市内、川崎市内の先生方に参加していただき、教育インターンシップに関わる手続きと23年度の実施状況報告、各学校の実施状況報告、意見交換等が行われました。

今年度の教育インターンシップ開始からまだ1ヶ月ほどですが、実習校の先生方から温かい言葉を頂きました。「一人の子どもの支援をお願いしているのですが、クラス全体の子どものこともよく見ていてくれます。」「子どもの様子によく気づいて自分から動いてくれるので、子どもたちとともに〇〇先生が来る日を待っています。」等。

第2回教育インターンシップ連絡協議会は、学生の報告会も兼ねる形で、12月中旬開催を予定しています。



## 教育ボランティア活動

昨年度のボランティア活動、地域連携の活動です。

### やってあげないこと

初等教育学科 2年 原 陽平

2010年10月、私はボランティアに参加した。内容は、小学校で行われる運動会の練習の手伝いで、具体的には一人の男子のサポートだった。彼は、一人で立ち上がることや、階段の上り下りが困難だった。私は彼に付き添い、主に運動会の全体練習のときにいくつかのサポートをした。

初めて彼に会ったのは、体育館での全体練習のときで、彼は初めこそ恥ずかしそうにしていたが、時々雑談を交わしながら触れ合ううちに笑顔を見せてくれるようになった。初日の帰る頃には、私自身も彼についてもっと知りたいと感じていた。彼は、自分一人で行うのが難しいこともなかなか手伝ってほしいとは言ってこなかった。反対に、担任の先生がそうしてもらうようにすすめたことに対しては、素直に手伝ってもらっていた。そこで、私は「やってあげてしまうのは彼のためにならないこともある」と思うようになった。一番彼のためになることは、自分ひとりのできることは自分でやるということであり、担任の先生はそういうことを実践していらっしやっただと思う。だからこそ、彼は自分でやれることは人に頼まず、自分一人では難しいことは素直に助けを求めることができるようになったのだ。たった3日というボランティアだったが、大切なことを学ぶことができたと思う。

### 回想・山内小学校個別支援学級音楽会

初等教育学科 准教授 高山 真琴

音楽会の最後の曲である「カントリーロード」を会場にいる全員で演奏し終えた時、そこに集う全ての人々の笑顔の間から、ひとりの6年生の泣きじゃくる声が響きました。1ヶ月後には卒業、進学、進級と、新たな一歩を踏み出す子どもたちへの応援メッセージとして選んだ曲が、子どもの心を揺さぶった瞬間でした。

「子どもたちのために音楽会をしていただけませんか？」音楽の力を信じ、それを感じ取ることができる子どもたちのために、と願う個別支援学級担任F先生の声を受け、音楽会プロジェクトは動き出しました。演奏する対象、目的、時期、場所が明確になると、いよいよプログラミングに入ります。どんな曲を選びましょう？「この子たちが聴き手として主役になれる音楽会であって欲しいのです。」方向性は定まりました。

そこから、様々な試行錯誤と準備を経て、平成23年2月24日、3・4校時を使っての個別支援学級音楽会『ふゆをたのしく』は実現しました。

音楽による様々なつながりを経験していく中で、音楽を共有できる場を作る楽しさを改めて感じる今日この頃です。



## 教育実践総合センター夏季講座

8月6日(土)、特別活動教育実践フォーラムを開催します

**日時** 平成23年8月6日(土)  
13:00~17:30

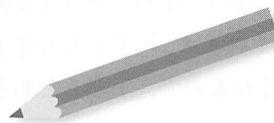
**場所** 國學院大學横浜たまプラーザキャンパス  
1号館講堂

### 内容

#### 「國學院大學特別活動実践フォーラム」

～今、求められる確かな集団活動指導力とは何か？

新しい年間指導計画、指導案モデルや指導法、学校・学級経営を追究する研修講座～



新富康央学部長の講話、コーディネーター宮川八岐教授のもとに鼎談、分科会(学級会、児童会・クラブ活動、学級活動、学校行事、中学校活動全の案等)を予定しています。